

古

畑

直

定

朗



〜とある、別荘での話〜

5

別荘にて。

---

「えー、皆さん、ここまでARの4人と推理勝負をしてきたわけですが、いよいよ次で最終章です。そして、この物語を最後に、しばらく、私は、事務作業に徹しようと思います。実質、最後の事件になることに・・・へへへ。古畑直定朗でした。」

群馬県、とある別荘。2階の一番奥の部屋のベッドに、一人の女性と、一人の男性がいる。

「なあ、なんとか答えてくれよ。どうして答えてくれないんだよ。」

「もう、無理よ。私、これ以上、書けない。」

「じゃあ、辞めるって事か？」

「これ以上、筆を持つことが出来ないの。そんな事よりも、あの人の事が気になっちゃって。」

「俺ら、付き合ってるんだよな。」

「付き合ってたけど、もう別れて欲しいの。本当に、無理なの。」

「・・・少し、頭を冷やさせてくれ。」

男は、ベッドを出て、服を着て、部屋を出た。外は、大雨が降っていて、真夜中のしんとした空気に、痛々しい音が鳴り響いていた。

男は、冷蔵庫の中にあったココアを取り出し、少し、温めて、それを飲んだ。暖房の効きがあまり良くなく、少し、肌寒い。

少し時間が経ち、男は、再び、仕事をしようと自分の部屋へと入った。しかし、落ち着かない。先に断わっておくが、この時は、まだ、この男は、殺人を犯すなど頭の片隅にもなかった。そして、この事件は、衝動的に彼を動かしてしまったといっておく。

女が男の部屋をノックした。

「ああ？」

「あのさ、フライパン、どこにやったっけ？」

「フライパン？」

「うん。卵焼き、作ろうと思って。」

「あー、確か、地下の倉庫にしまったんじゃないっけ？」

「一緒に来てくれない？電気つかないし。」

男は、しょうがなく、重い腰を上げて、部屋を出た。そして、地下室へと向かった。この別荘は、以前、イタリアの銀行の支店長が使っていた関係で、

地下室には、大きな金庫があった。しかし、今は、その金庫もただの倉庫となっていた。

「あれー？この辺にあったはずなのに。」

「もう少し、奥じゃないか？」

男は、懐中電灯を女の探すところを照らし続けた。ふと、寄りかかっていた、金庫の大きな扉を閉めたら、どうなるんだろうと考えた。もし、ここで、締めてしまえば、彼女は、密室でしかも、空気がない金庫の中。きっと、死んでしまうはずだと。考えた。

男は、静かに、その扉を閉め始めた。

そして、

「あれ？えっ？和希？何してんの？」

「じゃあな。のぞみ。」

金庫の扉は閉められた。そして、和希と言われた男は、静かに、階段を上がり、そのまま、別荘を後にした。

それから、3日間。彼は、何事もないように過ごした。彼は、三十三間堂和希。人気売れっ子脚本家である。そして、あの金庫に閉じ込めた彼女は、女優と小説家の肩書を持つ、和泉のぞみ。和希とのぞみが交際していたことは、事務所の人間も、もちろん、世間にも知られていない。だからこそ、あの別荘で密会する事が、二人の唯一のデートだった。しかし、あの夜、のぞみは、かねてから、噂のあった俳優、進藤雄一と、浮気している事を和希に明かした。そして、進藤と結婚したいと言い出したのであった。

世間の芸能ニュースでは、人気女優の和泉のぞみさんが、謎の失踪！と、毎日のように報道されていた。しかし、和希は、知らぬそぶりで、その3日間を過ごしたのだった。

3日間後。春の雨が降る夜、和希は、再び、群馬へと向かった。少し、気が重い中、別荘へと到着した。まず、自分の部屋へと向かった。そして、懐中電灯を持ち、地下室へと向かった。

もし、何かの拍子で、生きていたらどうしようと不安になったが、和希は、思い切って、そのドアを開けた。

「死んでる。」

間違えなく、そこには、和泉のぞみの変わり果てた姿があった。彼女は、なぜか、紙とペンを持っていた。しかし、その紙には、何も書かれていなかった。和希は、内心安心した。もし、何か、自分が殺めたという証拠があった時にはと思っていたからだ。

そして、和希は、警察に連絡した。

「もしもし、実は、久しぶりに別荘に来たら、彼女が死んでいるんです。」

しかし、警察は、この大雨で、道路がふさがってしまっている為、すぐには行けないと言った。

明日には、行けるだろうと。

和希は、しょうがないと思い、その夜をこの別荘で明かす事にした。

古畑が来る。

---

しばらくすると、インターフォンが鳴った。

「誰だ？」

この別荘に一番近い別荘では、2キロは離れている。そこだって、こんなオフシーズンに、誰かが来るはずがなかった。

「はい？」

「あー、すみません。わたくし、警視庁の古畑と申します。あの、偽物とかじゃなくて！ほら！」

ドアの覗き窓から見ると確かに、警察手帳を出した男が立っていた。和希は、ドアを開けた。

「すみませーん。へへへ。実は、車が、エンストしてしまいまして。携帯の電源も切れてしまったので、もしよろしければ、お電話をお借りしてもよろしいですか？」

「ああ。どうぞ。ってか、びしょびしょじゃないですか。」

和希は、タオルを持ってきて、古畑に手渡した。

「いやー、至れり尽くせりですすみません。へへへ。では、お電話お借りします。」

古畑は電話を掛けた。

「あー、捜査1課の古畑です。へへへ。実は、群馬で車がエンストしてしまいました。はい。ええ。今日は、帰れそうにありません。へへへ。ええ。星野先生の取り調べは、明日行います。はい。泉舞にもそうお伝えください。はい。」

古畑は、電話を切った。

「いやー、助かりました。それでは、失礼します。」

「え？車の中で待つんですか？」

「ええ。さすがに、お邪魔ですから。」

古畑は、玄関を指差した。そこには、女性ものの靴があった。のぞみの物だった。

「いや。実は、ちょうど、さっき警察に連絡したところで。」

「おや？」

「実は、僕、半年ぶりに、ここへ来たんですけど、さっき、地下室で・・・」

和希と古畑は、地下室へと向かった。

「こりゃあ、死んでますな。また、すごい金庫です。はい。」

「ええ。前の住人がイタリアの銀行の支店長さんだったので、この金庫がありまして。今は、倉庫代わりとして使ってたけど。」

「こちらは？」

「彼女です。世間には、公表してませんでしたけど、和泉のぞみです。」

「ええ？！あの、“渡る世界はワニばかり”の？！」

「ええ。」

「日本の中心でDIEを叫ぶ”の？！」

「ええ。」

「“Aota口ワイアル”の？！」

「何ですかそれ？」

「いやー、ビックリです。確か、失踪されていたと。」

「ええ。たぶん、休暇を取って、ココに来たんでしょうけど、何かの拍子で、この扉が閉まって、出られなくなっちゃったんでしょう。」

「そのようです。ちなみに、あなたは？」

「あっ、僕は、脚本家の三十三間堂和希です。」

「ええ?!あの“大阪ラブストーリー”の?!」

「そうです。」

「あの“6001回目のプロポーズ”の?!」

「そうです。」

「あの“爆弾魔 青ノ丸極”の?!」

「それは、知りません。」

「そうですか!こりゃ。ビックカップルだあ!」

「で、古畑さん、どうしましょう。」

「そうですね。とりあえず、今は、何もできません。まあ、たぶん、事故でしょうから。明日、群馬県警が来るのを待ちましょう。」

「はい。」

二人は、そこを後にした。そして、古畑は、その雨がやむまで、いることになった。

「あの一、これ読んでもよろしいですか？」

「ああ、どうぞ。」

「映画“HELLO”ですか。」

「ええ。検察官がハローハローと言う物語です。」

「ふーん。ちょうど、私も、この間、事件で、検察官を逮捕しました。」

「あの、東京地検の？」

「そうです。しかし、彼は、殺人犯ではなく、殺人未遂でした。」

「是非、詳しく聞かせてください。良いネタになりそうです。」

古畑と、和希は、古畑が体験してきた事件の話で盛り上がった。そして、しばらくして、

「そうだ。古畑さん、おなかすきませんか？」

「ええ。」

「ラーメン作りますよ。僕、これでも、料理得意なんです。」

「嬉しいです。ちなみに、私も、料理は、得意です。へへへ。特に、ニンニクたっぷりペペロンチーノとか。」

「・・・へえ。そうなんだ。」

そして、和希は、外へと出た。

「あれ?どこ行くんですか？」

「食糧庫が、外にあるんです。古畑さんは、中で待っていてください。」

「いやー、私も行きます。へへへ。」

土砂降りの雨の中を二人は、食糧庫へ入った。真っ暗な中で、和希は、具材を取り、

「行きますよ！古畑さん！」

「はい！」

しばらくして、出来上がったラーメンをすすり、

「では、ちょっと、僕は、仕事をしますので、部屋に行きます。」

「はい。私は、ここでこの脚本を読ませていただきます。」

そう言うと、和希は、部屋へと入っていった。

古畑は、脚本を読み始めた。そして、しばらく経ち、地下室へと向かった。そして、もう一度、現場を見た。その遺体が持っていた白い紙を見た。そして、古畑は、既に、見抜いてしまったのである。

「えー、というわけで、これは、殺人事件です。犯人は、もちろん、三十三間堂和希さん。彼は、ここへ来たのは、半年ぶりだと言いました。しかし、おかしいところがたくさんありました。そして、この和泉のぞみさんが持っていた白い紙。これが、一番の決め手になりました。これは、彼女からのメッセージです。それでは、しばらく、休暇をいただきます。へへへ。古畑直定朗でした。」

解決。

---

古畑が、居間へと戻ると、和希がいた。

「ああ。地下室へ行っていたんですか。」

「ええ。ちょっと気になることがありますね。」

「何ですか？なんか、ありました？」

「ええ。えー、非常に申し上げにくいのですが、このご遺体、実は、殺されております。」

「え？」

「これは、殺人事件です。はい。しかも、犯人は・・・あなたです。三十三間堂和希さん。」

「ちょ、何言ってるんですか～。」

「ポイントは、まず、半年ぶりにここへ来たというあなたが、食糧庫にある食材を普通に持ってきた事です。普通、半年も前に来た以来なら、食材が腐っていないかをまず確かめます。つまり、あなたは、つい最近、ここにいらしています。」

「・・・。」

「そして、半年ぶりに来たというのにもかかわらず、ほとんど、埃がありません。」

「・・・。」

「そして、最大のポイントは、コレ。」

古畑は、白い紙を見せた。

「それは、のぞみが持っていた紙。」

「ええ。なーにも書かれてません。」

「それが、なんだっていうんだよ。たまたま、苦しくて握ったのかもしれないじゃないか。」

「しかし、ペンも持っています。どんなに真っ暗でも、書こうと思えば、何かメッセージが残せたはずですよ。しかし、彼女は、残さなかった。つまり、これがメッセージなのです。」

「どういう意味？」

「つまり、何も書かなかったという事は、書く意味がなかったんです。書いたら、きっとこの紙は、処分されてしまうからです。良いですか？三十三間堂さん、この紙が意味するのは、最初に見つけた人が犯人だって事なんです。何も書いていなければ、きっと、そのままにするだろうと彼女は、思ったのでしょうか。」

「・・・ははは。まさか、これが、メッセージだったなんて。全然気づきませんでしたよ。」

「ええ。彼女の最後の抵抗だったのでしょうか。」

「みたいですね。僕は、彼女の事が好きでした。本当に。しかし、彼女は、別の男と結婚すると言い出しました。本当は、殺すつもりなんてなかったんです。でも、あの時、金庫に彼女と一緒に行かなければ、きっとこんな事にはなっていなかったかもしれません。」

「お察しします。どうか、自首される事を願います。」

「そうですね。それが、一番、よさそうですね。」

「過ちは、誰にでもあります。しかし、殺人だけは、よろしくありません。へへへ。」

「今度の作品では、気を付けますよ。」

「ええ。是非、この続きを見せてください。」

古畑は、読んでいた脚本を見せた。

「何十年か、先にね。」

春の雨は、少しずつ、収まりつつあった。

2006年12月31日

三楽亭 田嶋